

散策

ソン・ボミ

(辻本武 訳)

彼女は夫を揺すって起こした。彼は深く寝入っていて、まだ目を覚ましていないようだったが、彼女は左肩を続けざまに揺すった。やがて彼が「うーん」という声を出して体をごそごそ動かし、彼女は彼の耳に口を当てて、小さな声でささやいた。「起きてよ、起きてよ、早く。」彼が目を開けた。ドアの隙間から明かりが差し込んでいたが、それ以外に部屋の中には光はなかった。不完全な暗闇の中で、彼は自分の目の前に妻のシルエットが段々はつきりと浮かび上がるのを感じた。彼女はコートを着て、マフラーをぐるぐる巻いて、手袋をしたままベッドにどかっと座っていた。彼はあきれたという顔をしたが、すぐに両手を伸ばして彼女の腰を抱いた。

「今、会社から帰って来たの？」

彼はまだ寝ぼけていたが、優しい口調で彼女に聞いた。

「起きてよ。」

彼は目をつぶり、彼女の胸に顔をうずめた。

「起きてよ、起きなさいと言ってるでしょ。」

彼女は自分の腰を抱いている彼の手を振りほどきながら言った。小さいが断固とした声だった。

「お父さんの家に行かなければならないでしょ。」

彼女は、腰を逃がしてはなるものかと更に抱きついて遊ぼうとする彼の手を振り払った。その時になってようやく彼は正気に戻ったのだった。

彼女の実家の父親は、二人の家から車で四〇分走ったところにあるソウル近郊の住宅街に住んでいた。ソウルの雑然とした雰囲気を嫌う、お金に余裕のあるお年寄りたちが集まって暮らす町だった。家は一様に大きくしゃれており、門の前には高級な車が駐車していた。五年前に彼女の父親は勤めていた銀行を定年退職し、その後退職金とあれこれの金を合わせて、この町に引っ越した。その「あれこれの金」の中には、彼女が援助してやったものもあった。その時の彼は、彼女が金を援助するのに何だかんだと口を挟む立場にはなかった。二年前に三ヶ月ほど仕事を休んだ時を除くと、働きづめでお金を稼いだのは彼女であって彼ではなかったからだ。彼女はブランド化粧品を扱う外国系企業に勤めていた。時には夜勤もせねばならず、しょっちゅう海外出張にも行かねばならなかったが、三ヶ月休んで仕事に復帰した後、彼女はもう出張には行かなかった。「私はこれから家族にもっと関心を寄せます。ごめんね。私があなたを大事にしなくて。」彼女は彼にこのように言った。彼女は父親にも気を使い始めた。夫を連れて父親の家に行ったり、一緒に食事をしたり、しょっちゅう安否を尋ねる電話をした。このようなことは以前にはなかったこ

とだった。父娘の通話はたいがい非常に短く形式的なものだったが、それでも彼女は電話をかけるのを止めなかった。彼女の父親はやはり娘の電話を心から待ち望んでいた。全てが自然に見えて、問題が生じる原因となるようなものは全くなかった。本当にすべてのことが上手くいった。

ところである日の晩のこと。彼女の父親が電話を取らなかつた。彼女は特に考えもせず、一時間後にまた電話をかけた。するとその時にようやく父親と電話が通じた。彼女は―その理由は自分でも分からなかつたが―自分が一時間前に電話をかけたとは言わないで、いつものように通常の会話を交わした。そして半月後にまた同じことが起こり、そして十日後にもまた同じことが起きた。そんな事がしばしば繰り返されると、結局彼女は父親が電話を取らないことに気に病むようになつた。たまりかねて彼女が、一体全体なぜ電話を取らないのか、ひよつとして毎晩どこかに出かけているのかと聞くと、父親は照れくさそうに笑つた。自分は夜中にする散策が面白くなつた、というのだった。

「誰もおらず、暗く静かな道を一人歩くと、自分の精神がきれいに洗われるということだよ。四十年間、お金に関係する仕事ばかりしてきたこの俺をきれいに浄化するということなのだよ。」
夫は義父の言葉を百%理解するのは難しいが、敢えてそれがウソだと考えることもないだろうと言う。しかし彼女の考えは全く違つた。彼女は父親が好きであつたが、父親を全く正直で間違つたことほしくない人間だと思わなかつた。彼女は父親と母親が離婚していた当時をはつきり記憶

しているのだった。彼女は笑わなかった。冷静な表情で、健康に良くないから控えてほしいとだけ言った。しかし彼女の父親の「散策」を止めなかったのも、結局彼女は父親の「散策」を苦々しく思うようになった。彼女は、自分のそのような思いは父親への愛情から出発しているのだと主張した。

「父は今かなり年取っています。以前と同じではありません。一人であのように夜に歩き回って何か事故でもあれば、どうするのですか？ 私は本当に心配になります。眠れないし、じっとしておられなくて。」

もちろんこんな心配をしたのは事実だったが、彼女が父親の散策を苦々しく思ったのは、他に決定的な理由があった。彼女は、父親が同じ村で一人暮らししているあるおばあさんと心が通じていると信じていたからだ。しかし彼女はそんなことを口外してはならないと思った。彼女は父親の恋愛についてあれやこれや言うと、自分が全く気のきかない人間に見られるようで、怖かったのである。

車にエンジンをかけた夫は彼女に聞いた。

「今すぐに、そこに行かなきゃならないの？」

しかし彼は彼女が何を答えるか、分かっていた。彼女はこんな時にはいつも「自分の父親だったらどうするか、考えてみてよ。」と言うのだった。「自分の父親がこんなに暗い晩に、町の路地

を歩いているとしたら、安心できる？」と言うのである。しかし彼は自分の父親についてそんな想像をすることが出来なかった。彼はこれ以上彼女を説得しようと思わなかった。彼はこれまで、彼女が納得するまで説得しようと思ったことが一度もなかったからである。彼は彼女に「ちよつと寝たらどうだ」と言った。

「車が混んでいないから、二〇分くらいで着くよ。」

彼女が勤めている会社は、小さな法律上のトラブルのせいで非常事態となっていた。毎日疲れた体で夜遅く家に帰って来たが、彼女は父親の家に電話をかけるのを忘れなかった。電話を取らない日があれば、彼女は夫と一緒に、それが何時であれ関係なく父親が暮らしている町へ車を走らせた。

彼女が座席を後ろに倒した。夜の十二時過ぎであったが、道にはまだかなりの車が走っていた。

彼女が独り言のように呟いた。

「一体これだけの人が、こんなに遅い時間にどこへ行くのかしらねえ。」

「家に帰る人だろう。」

「それまで何をしていて？」

彼が笑いながら答えた。

「お前のように遅くまで仕事をしていたのだろう。」

「そんなことはないわよ。」

「だったら？」

「さあ、どうでしょう。」

彼女は暗い車窓を黙って眺めていた。彼は可愛いと思ったのか、彼女の左の太ももを撫でた。

「会社の仕事はどう？」

彼が尋ねた。

「もうすぐ解決するようだけど、分かんない。」

彼女はこのような言つて座席を元に戻してから、腰を伸ばして真っ直ぐに座った。腰を真っ直ぐにしたので、まるで罰を受けた子供のように見えた。ちよつとしてから、彼女が思い出したように、話を続けた

「ひよつとしたら私、フランスに行かなければいけないかも知れない。」

彼は黙つて頷き、二人はしばらく何の言葉も交わさなかった。彼はサイドミラーのなかで勢いよく後ろに流れる道路の姿を眺めた。

「あなたは今日何をしていたの？」

「ただ、家にいたよ。」

「一日中？」

「うん、食器の後片付けもして、掃除もして、本も読んで、そんなことをしていたよ。何で？」

「なぜ学校に行かなかったの？」

「今日は講義もなく、ただ家にいたかったから。」

二人はまた言葉を交わさなくなった。彼は彼女より二歳若かった。彼は自分が同年輩の男よりも幼く見えると思っていたのだが、それはある程度事実であった。彼は英文学を専攻し、二年間ほどアメリカに留学した。そして今は英文学史を講義しているが、本当にやりたかったことは、小説を書くことだった。専攻学部にいた時期にはたくさんの小説を書いた。さらにはアメリカにいる時もたくさん書きまくった。ある時は、自分が作り出した話が多すぎて困ったぐらいだった。そんな時もあつたのだった。

目的地に到着すると、二人はいつものように車から降りなかった。彼女は車の中から父親の家の方をじつと見ながら電話をかけるのだった。父親が電話に出れば、彼女はまるで自分の家から電話をかけているかのようになんか聞いてから、何事もなかったように電話を切るのだった。電話を取らなかつた時には父親を待って、家に帰って来るのを見届けてから電話をかけた。父親は、娘がこんな夜遅い時間に家の前まで来て自分の安否を確認しているという事実は、夢にも思わないことだった。しかし今度は違つた。彼女は父親と話をして、自分がどれほど心配しているのか、直接言つてやらねばならないと思つたのである。彼女は父親がちよつと離れたところの曲がり角を歩いて来るのを見ると、直ぐに車から降りた。彼はこの時にどうすればいいのかわからず、ただ妻の後を追つて車から降り、ポケットに手を入れ、肩をすぼめたまま妻の後を歩いた。

「お父さん、私とちよつと話しましょう。」

彼女の父親は娘夫婦の急な訪問に非常に驚いて、当惑した顔を隠さなかった。彼女は父親の表情を見逃さず、ひよつとして他の人がいるのではないかと、父親が出て来た路地の後ろの方をちらつと見た。彼はポケットに手を入れたまま、義父に軽く目礼をした。三人の間には奇妙な緊張感が流れたが、それは誰もなまじつか最初に話を切り出して要らぬ損害を被りたくないという考えからくるのであろう。その緊張感を破つてまず最初に口を開いたのは、彼女の父親だった。

「まあ、とにかく家に入ろう。」

父親はドアロックの暗証番号を押しながら、改まった声で言った。

「何か急な事が起きたみたいだな。」

「お父さん、さつき電話を取らなかつたでしょう。」

「何だつて？」

父親は扉を開けずに、訳が分からないという表情で彼女を見た。しかし彼女が何の返答もしないので、彼が代わりに答えた。

「お父さんが心配で、そう言つたのですよ。」

最後に家に入った彼女がドアを閉めながら、大きく溜め息をついた。家の中は真っ暗ですぐに電気を点けると、家の中の家具類が見えてきた。居室のテーブルの上には告知書が置かれていた。

「お父さん、私がいつも言っているじゃないですか。こんなもの、自動振替にしなさいって。」

その方がずっと楽なんだから。」

彼女は神経を使うようにして言ったが、彼女の父親は特に意に介しない口ぶりで答えた。

「俺は自動振替なんて、まったく苦手なんだ。」

黙っていた彼が言った。

「へー、何故ですか？」

彼女があきれたという表情で彼を見た。彼女はそのような質問自体が不必要だと思っていたからだ。

「自動振替は信じられないんだ。あんなもの、誰が信じられるのか？君、どうだね、一杯飲むかね？」

「いいえ。」

彼が首を横に振った。彼は今から事態がどう推移していくのか、見るだけにしようと思っていた。父と娘のやることに自分が入り込まねばならないような状況が発生しないことだけを願っていた。

「お父さん、何で私の言うことを聞かないのですか。このように寒い夜中に出かけて、倒れたりでもしたら、どうなるというのですか？道がどれほど滑るのか、分かっているのですか？私は本当に心配になって寝れないのよ。」

「そうなら、ダメだなあ。」

父親は本当に済まないという表情になって、彼女をじつと見た。

「しかし、こんな時間に家まで押し掛けて来るとは、ちよつと慌てるなあ。」

彼女は、押し掛けて来た、という表現に少し興奮し、そして激しい口調で言った。

「今日が初めてじゃないのよ。」

「何だつて？」

「今日が何回目なのかも分からないわ。」

「こいつ！ それ、どういうことなんだ？」

「あつちに車を止めて、お父さんが家にいるのかどうか確認していたのよ。」

「俺を探偵してたのか？」

「お父さん！」

彼女は自分を助けてほしいという表情で彼女を見た。しかし彼は彼女と目を合わすや、首をうなだれてしまった。彼女はほとんど泣き顔になって、父親の手を握った。

「お父さん、私は本当にお父さんのことが心配なのよ。散策はお昼にすればいいじゃないですか。」

彼女は心配で一杯の表情で父親を見た。

「こいつ！ よく聞け、お前もよく聞け。これは俺の道楽だ、そうと考えられんのか？」

彼女は、道楽、という単語が大変不適切と感じた。道楽だなんて！ 父親はどうしてあんな風

に話をするのか？ 一体なぜ？

その時、ふと彼女は自分が何を願っているのが何なのか、分かった。今までの彼女は、父親が女に会っていることがすぐく嫌なことだと思っていた。父親が女に会っていないでくれと願っていた。しかしその瞬間、彼女はそうではないと分かった。自分が本当に願っていたのは、それではなかったのである。彼女の心を耐えられなくする理由が他にあったのだ。それは父親が自分にウソをつくという事実だった。彼女は父親が自分に真実を打ち明けてくれるのを願った。私が望んでいるのは、せいぜいそれだけだ、と彼女は思った。

「だから、その、道楽、を、明るい時にしてはダメなの？」
父親が溜め息をついた。

「実は、これはだな。ただ俺が一人秘密にしたいことなんだ。」
父親が躊躇っていた口を開いた。彼女は大きく深呼吸した。ついに父親が真実を語ってくれるものと考えると、一瞬心がすつきりしたのだった。

「実はだなあ。これは死ぬまで秘密にしておきたかったのだが、……これは本当に……実は……」。

彼女は父親の話を怖がる気配を見せるほど、自分が安心するよう感じた。誰かが自分に強い気持ちで真実を打ち明ける時間が段々近づいているというところから出てくる感情だった。

「自分のことなんだ。あそこのあの公園に一ヶ月に二・三回ぐらい、若い夫婦がやって来る。」

単なる若夫婦ではなく、幼い子供たちなんだ。本当にまだ子供なんだ。」

父親がようやく話を始めた時に気が抜けたのは、彼女だけではなかった。彼もやはり彼女の考え—父親が女と付き合っているという—をしていて、それがある程度事実だろうと信じていたからであった。

「何ヶ月か前の夜に、何かを買おうと出かけた時があるのだが、その時偶然に見たんだ。非常に子供っぽい夫婦だったのだが、いつもその公園のブランコに座って何かを相談していたんだよ。それで……。」

そこまで話をした時、彼女はそつと父親に言った。

「お父さん。」

彼女は一瞬言葉を発しないで父親を見ていたが、しばらくしてからこう言った。

「一体全体、どうしてウソをおっしゃるのですか？」

こう言った後、彼女は振り返って彼を見た。そして彼に向つてもう一度言った。

「一体全体、どうしてウソを言うのかしら。」

彼が当惑したように肩をすぼめた。父親はしばらくの間、何も言わずに娘夫婦を見て、平静な気持ちを崩さないで話を始めた。

「そう、何ヶ月か前に、お前らが二人で俺の家に来て、一緒に食事したことを覚えていないか？ 覚えていないはずがないだろう。その時、君はワインを何本か買って来たじゃないか。もちろん、

それを自分の金で買ったものではなかったらうが。ともかく大変いいワインだったよ。ところで、こいつがそれを一杯飲んだんだ。完全に酔っていたんだ。俺はその時こいつがあれほど腹を立てるのを見たことがない。腹を立てて君にワイングラスを投げつけたんだ。覚えてるか？ 覚えているはずだ。俺は知っている。お前は酒に酔って一つも覚えていないと言っていたが、全部覚えていたじゃないのかね？ お前を非難しているのではないぞ。お前は腹を立てねばならない時に、我慢した。なぜ怒らないのか、お前は賢い。俺がお前の母親と離婚してからは、お前は俺に一度も心配をかけなかった。」

「そんな話、聞きたくないです。」

「分かってている。しかしこれは重要な話なんだ。」

「何がですか？ お父さんとお母さんが離婚した話なの？」

「いや、お前とお前の亭主に関わる話のことだ。」

父親は彼を見た。その表情は何かを叱責することもなく、何かを追及することもなかった。それはまるで何かを渴望することに近かった。彼はそれを分からないふりをし、義父と目を合わせたように努力した。やがて父親は彼を見るのを止め、話を続けた。

「しかしお前らが聞きたくないというなら、俺もそのことについて、もうこれ以上話はしない。とにかくその日お前らが帰ってから、俺は一人残って掃除をした。お前は酔いすぎていて、君も全く気がぬけてしまったからなあ。実際に君はこいつを車に乗せることも出来なかった。」

それくらい、こいつは大変に腹を立てていたのだから。とにかくその日の俺は、この家の片付けだけはやった。割れたワイングラスを掃き出して、テーブルクロスも取り外して捨てた。それがどれくらい高価なものか、お前もよく知っているだろう？ 食器の後片付けまで全部終わらせて、居室のソファに静かに座っていたら、ふとビールを一杯飲みたいと思った。それで冷蔵庫の中を探したのだが、ビールがなかったんだ。それで買ってくることにしたんだ。その日の晩は、ただ眠れなかったんだ。」

彼に子供は娘一人だけだった。彼は自分の娘が妻に非常によく似ているといつも思っていた。そしてそれが、うれしかった。彼の妻は大学で絵画を専攻した。二人が付き合っていた当時、彼女は留学を考えていたが、彼は遠い所に彼女と離れて長い間待つ自信がなかった。もちろん、それは彼女も同じことだった。彼女もまたやはり長い間彼と離れている自信はなかった。彼女は結局留学を諦めた。留学に行かなくても、専攻を生かせる仕事が見つかるものと信じ、そういう自信もあった。しかし結婚をして出産をし、妻は絵画の方は完全に手を引くようになった。後で彼女は、夫と娘のために自分の才能が全部枯れてしまったという話をしよつちゆうして、夫への恨み言を言った。彼はひたすら稼ぐことを好んだ。彼は英文学科を優秀な成績で卒業した。景気が大変いい時代だった。彼はいい銀行に就職し、誰もが舌を巻くほど一生懸命に仕事をした。彼は一段階ずつ上昇して達成感を味わっていたが、妻は自分の人生が一段階ずつ下降していると感じ

た。彼女はその感じを時々娘に言った。しかしその時の娘の年はせいぜい十歳で、そんなことを理解するには幼すぎた。しかし、その時まで何か問題が表面に現れることはなかった。相変わらず表面的には夫婦仲はよく、娘も幸せだった。そして昔も今も彼の頑固さは曲がることのないものだった。だから妻は時々彼を「意地っ張り！」と呼んだ。娘が成人になってからも、その言葉が時々口を上った。その言葉を思い出すと、娘はわが家族がこれ以上ない幸せで和気あいあいだったあの時を思い出していた。結局別れてしまったのだが、それでもそんな時が一瞬でもあったということについて、娘は大変感謝した。

夫婦が離婚することになった時、二人とも自分の娘には大変済まないという感情を持っていた。離婚したという事実だけではなく、娘の前で見せた行動や一言のためであった。娘が結婚相手を連れて母親を訪ねた時、母親は非常に感激して、このように言った。

「この子ったら、お母さんはうれしい。私はお前が本当に結婚なんてしないと思ってたのよ。」父親も同じだった。彼は娘が幸せな結婚生活を築くことを望んだ。この世で誰よりも幸せになることを望んだ。娘が連れて来た男は、特にどういふことのない大学の講師であり、際立って将来がある者ではなかったが、それでも二人の間に生まれた娘の結婚を、心より祝福してやった。

彼は娘と婿を見送った後、全く寝ることができなかった。彼は24時間営業のコンビニに行つて酒を買つて来ることにした。初めはなるべく早く酔つて寝たかったが、一度外に出てしまうと心

が少しずつ緊張していくように感じた。彼は自分に必要なものは酒ではなく、しばらく息を抜く余裕だということを悟った。だから彼は町を一回りした後、酒を買うのか、そのまま家に帰るのか、もう一度考えてみることにした。周囲は静かだった。彼はきれいに立ち並んだ建物の間を歩いて行った。暗闇の中に立つ建物群はまるで寝入っているようだった。みんなが素敵な夢を見てるように見えて、彼はこの眠りが永遠に覚めないことを願った。彼は町の中央の大きな公園まで歩いて行き、公園のベンチに座ってしばらく休むことにした。暗闇に染まった木々に包まれて一人座っていた彼は、今まで感じたことのない感情に浸った。少し恐ろしく、あるいは少し心苦しかったのであるが、他方では浮き浮きもした。口では到底説明できない気分だった。彼はそんな感情が自分にいい影響を与えるのか、それともその反対なのかさえ区別できなかった。自分が浪漫的な感傷主義に陥ったのか？ 彼はこのように自分自身に反問しながらまた歩き始め、いつの間にか町の一番高級な邸宅の前を通り過ぎた。その家の前には、また小さな公園があった。公園の中心には、小さいが華麗な噴水台があつて、人はそこを噴水公園と呼んだ。夜には噴水は動かないようだった。彼は風で池の水面が揺れているのを見た。噴水公園のすぐ横には小さな児童公園があつた。その町では児童公園で遊ぶぐらいのチビッ子は住んでいなかったが、その住民たちの孫たちが遊びに来る時に備えて作られたものだった。児童公園の四方には大人の腰ぐらゐの高さの灌木が植えられていて、遠くから見ればまるで垣根のようだった。彼が噴水公園を通り過ぎて児童公園の方に歩いて行く時だった。児童公園の中からひそひそ話す声が聞こえてきた。

一瞬彼は怖くなった。彼は反射的に歩みを止め、体を低めて灌木の陰に体を隠した。誰だ？今の時間に一体全体誰なんだ？彼は体を低めたまま灌木の向こうを見て、声を出した人を探した。声の出したのは児童公園のブランコに座っている二人の男女だった。二人はポテトチップを食べながら話をしていた。女がお菓子の粉が付いた指をちゅうちゅうと吸った。二人は彼に何の関心もなく、自分たちの話に夢中になっているように見えた。彼は背筋を伸ばして、まるで何事もなかったかのように二人に目もくれず、そこを立ち去った。そして彼は二人が自分に気付かないことを願った。彼は自分が夜遅く町を徘徊している事実を誰にも知られたくないと思っていたのだ。

彼が二人をまた見たのは、一ヶ月ぐらいしてからのことだった。その間にも彼は夜の散策に出かけたが、その事実を娘が知るようになった。娘は彼が夜の散策を死ぬほど嫌がったために、彼は出来れば自制しようと思った。しかし時おり我慢できないくらいに憂鬱になると、やむにやまれず外に出かけ、町を散策した。コースはいつも同じだった。町の中央の公園まで歩いて行って、しばらく休んでから町一番の高級邸宅の前の噴水公園を通り過ぎ、児童公園を経て家に帰る。二回目にあの若い夫婦を見た場所もこの児童公園だった。しかし彼は前回のようにそこを通り過ぎることは出来なかった。二人を見ては噴水公園に戻らねばならなかった。何故なら二人がブランコに座ってデイクスをしていたためであった。彼にはどうってことはないとその横を通り過ぎる勇氣はなかった。彼は揺れ動く心を沈めながら、噴水台近くのベンチに座った。そこならば、二人は彼を見ることの出来ないのだった。しばらくして二人の声が聞こえ始めた。時には笑い声

も聞こえた。笑い声が聞こえると、彼は何故か安心した。しかしある瞬間から二人の声が段々大きくなり始め、いきなり女の方から怒って大声を出した。

「あんたが呼び鈴を押すと約束したじゃない！最初からそう約束したから、うちはここまであなたについて来たんだよ！」

男の方は黙って聞いてばかりであった。彼はベンチに座りながら二人の話を聞いていた。

それから彼は二人を時おり見るようになるが、二人が最初の週と最後の週にほとんど定期的にそこにやってくるのが分かってきた。そして彼は、二人が結婚式を挙げることが出来ず婚姻届だけを出した夫婦だということと、せいぜい二十歳になったばかりの子供らであることも知ることがようになった。彼は夜に出かけるのを娘が心配している事実を知っていた。だから夜に出かけるのを出来る限り自制しようとしたが、幼い夫婦が来る日になると、どうしようもなく夜の十二時過ぎに家を出るしかなかった。二人が児童公園に来ているのを確認すると、彼は噴水公園に座って二人の話を盗み聞きした。二人が来ない日には、動いていない噴水台の池の中をしばらく見ていた。幼い夫婦は大部分の時間を取るに足りない会話を交わし、時には笑った。そうしているうちに、その町で一番の高級邸宅の呼び鈴を押すのかどうかで喧嘩をした。最後になると、結局男は口を閉ざし、女は泣き出した。それはそれで理解できるものではなかった。あれほど幼い夫婦が夜遅い時間にそこに座って感情を剥きにして神経を消耗させることも理解できず、自分が二人を見に出かけるという事実、そしてある意味では自分が二人を待っているという事実も理解でき

なかった。季節は冬に向かつて駆け出して、彼は二人がもう現れないかと思つて恐れた。しかし幼い夫婦は最初の週と最後の週になれば、間違ひなくその町を訪問したのだった。

いつの日からか、若い夫婦はお菓子を食べる代わりに酒を飲み始め、二人の間を歩き来する会話も以前より過激になった。二人は乱暴しようとするように見えた。彼は時には二人の前に出て何か手助けしてやりたかつたが、それは自分がせねばならないことなのか、あるいは自分が出来ることなのか確信が持てなかつた。それは奇妙な感情だった。彼は自分がこのように何かを確信できない立場に置かれてゐることを、ずっと前のことであることを知るようになった。

「そうではないかね。俺がすることは大部分単純なことだった。俺は何でもすべて確信を持つてやつてきた。たくさんの人が職場を辞めねばならなかつた年に、俺が生き残ることが出来た理由のうちの一つは、俺が確信を持って仕事を処理してきたからだ。俺はぐずぐずすることもなかつたし、あたふたすることもなかつた。俺はだ。俺がこんなことを言うと、お前がどんな反応をするのか怖いのだが、お前の母親と離婚した時も確信があつた。お前の母親と別れるのが俺の人生に助けになるということだ。そう、俺は俺の人生に助けになることだけをして生きてきた。しかし、あの夫婦について俺は何の決定も下すことが出来なかつた。そう、その通りだ。お前の言うことは合つてゐる。二人は俺と完全な他人なのだからそうなのかも知れない。俺と何の関係もない、本当に根本的に何の関係もない他人ということだ。」

娘夫婦が押し掛けてきたその時も、彼は噴水公園に座って二人の対話を盗み聞いて帰って来るころだった。天気がかなり寒くなったために、彼は散策に出る時は分厚いコートを着て、マフラーを首に巻き、手袋をし、耳まで覆っている防寒帽子を被った。風邪にもなつて娘を心配させたくなかった。しかし幼い夫婦の身なりは、初めて見た時とほとんど同じだった。二人とも古びた薄いコートを着ていることだけが違っていた。二人は手袋もなく、いつも素手だった。その日、二人は非常に仲のいい夫婦のように振る舞った。ブランコに座ってお互いの凍った手をぎゅっと握った。

「来月、私たちの結婚記念日があること、知ってる？」

女が優しい声で男に言った。男は頷きながら、分かっていると答えた。

「うちはあんたと結婚したこと、後悔していない。うちは、あんたがあんたの家の呼び鈴を永遠に押しせないとしても、変わらずにあんたを愛している。分かっているでしょ？」

男はまた頷いた。

「しかし、あんたがあんたの家の呼び鈴を押しにくれたら、うちはもう少し楽な気持ちであんたを愛するようになるかも知れない。うちは……あんたを本当に愛しているのに……今は気持ちが全然楽じゃない。幸せじゃないというのではなく、ただ不安なの。うちは……自分の気持ちは自分が分かっていると思つて……」

女の言うことがしよつちゆう途切れた。女は次の言葉が思い付かない様子で苦しそうに話を続

け、出来る限り優しく愛らしい口ぶりで語ろうと努力していた。その時男は、女の話の話を遮って言った。

「なあ、お前。僕が何故あの家の呼び鈴を押すのを躊躇っているのか、知ってる？」

女は男を見た。彼は話を盗み聞きたくて、防寒帽子を脱いだ。耳が直ぐに冷たくなった。

「僕のことなんだ。以前に僕のおばあちゃんが体の具合をひどく悪くした時があったんだ。その時のおばあちゃんの年はもう七〇を越えていたんだ。大手術を既に二回していたんだけど、三度目の手術の時は皆がおばあちゃんはもうダメだと思っていたんだ。ところが奇跡的におばあちゃんは助かったんだ。そして自分の家に帰ることが出来たんだ。僕はその時十歳だった。両親が僕をおばあちゃんの家連れて行った。おばあちゃんの家には可愛い鳥の鳴き声が出る呼び鈴があったんだけど、僕はその呼び鈴を押すのがメチャ好きだったんだ。だからおばあちゃんの家に行けば、その呼び鈴を押すのは僕の役目だった。背が届かないから、お父さんがこのように僕を持ち上げてくれてたんだ。」

男は、このように、と言いながら小さな子供を持ち上げる仕草をして見せた。

「あの日も同じだった。その時はもう呼び鈴を自分で押せるぐらいに大きくなったのだから、僕はすっかり呼び鈴を押した。鳥の鳴き声をした。そうしたらおばあちゃんが玄関を開けてくれたんだ。僕たち家族は家の中に入った。それからリビングに座っている間、おばあちゃんは僕に何かを持ってきてやろうと自分の部屋に行った。いくら待っても出て来なかった。どういうこと

か、分かる？ おばあちゃんは玄関を開けてから自分の部屋に行ったその時に死んだんだ。今何の話をしているか分かる？ だから、お前。僕は呼び鈴を押すことが出来ない。呼び鈴を……押すことができないんだ。」

男が話を終えると、しばらく静寂に包まれた。彼は口の中に溜まった唾を飲み込むことさえ出来なかった。その時だった。女が大きな声で笑い始めた。彼は我も忘れて両手で帽子をぎゅっと握った。しばらくして笑うのを止めた女が一言一言はつきりとした調子で言った。

「あらまあ、そのセリフはうちらがしよっちゅう見ているアメリカのシットコムドラマ（一話完結ドラマ）に出てきたものじゃないの。何故ウソをつくの？この場になって。」

男は女を見た。今度も静寂になった。しかし今度は誰も笑わなかった。誰も口を開くことができないだろうということを、男も、女も、そしてそれを盗み聞いていた彼も分かっていた。彼は頭をうなだれた。帽子をぎゅっと握りしめている、皮の手袋をした両手が見えた。冷たい風が彼の顔を殴りつけた。時間がどれほど流れたのか？彼は帽子を被った。もう家に帰らねばならない。ベンチから立ち上がる時、彼は女の声を聞いた。その幼い女の子はすぐに前とは違い、泣き出しそうになって、このように言っていた。

「あんた、ごめんね。本当にごめんね。そんな風に言うつもりはなかったの。うちはあんたの気持ち、みんな分かっている。あれがウソでないことも分かっている。分かっているのよ。本当にごめんね。」

家に帰る時は、彼女が運転した。二人は何も話さなかった。彼女は絶望感に陥った。彼はこの全ての状況がちよつといら立ってくる状況だった。彼は運転する彼女の横でぼうとした表情で黙って座っていたが、実際のところ彼の頭の中では何ヶ月か前に酒に酔って大声をあげた彼女の顔が思い出されては消えるを繰り返していた。その時彼女は色々しゃべった。口を開く度に様々な非難の言葉を浴びせたが、次の一言だけは彼女の口を開くと必ず登場した。「あの時、あんたはどこにいたの？私が家にいない間、あんたはどこにいたというの？本当にもう！」

口をぎゅつとつぐんでいた彼女は、家に帰って来て服を着替えてベッドに横になるや、訳の分からなくらいに激しく泣いた。彼女が泣き止むまで、彼は彼女の横に座って彼女の肩をさすった。彼女は泣きながら、お父さんが一体全体何故あんなウソをつくのか理解できないと言った。彼がウソではないかも知れないと言って彼女をなだめたが、彼女は聞く耳を持たなかった。

「私もそのシットコムドラマを知っているよ。私が子供の時、父親と仲良く見ていたシットコムだから。それはずっと昔にしていたものよ。今二十歳ぐらいの女の子は、そんな内容を分かんはずがない。分かっている？あなた、私の言うこと、聞いている？」

彼女は全く同じ話を繰り返し、ずうつと泣くばかりであった。しかし時間がしばらく経つてから、彼女は正気に戻ることができ、彼はそんな妻のためにお湯を持ってきてあげた。

「私はお父さんが誰と付き合っているにも関係ない。ただし私はお父さんが真実を言ってくれる

のを願っているだけなのよ。ウソはもう、うんざりだわ。」

言葉を続けながら彼女は時々しゃつくりをしたが、その程度ならいい方だ。彼は電気を消して彼女の横に寝て腕枕をしてあげた。彼女は彼のお腹の上に手を置いて抱きしめ、彼の胸に頭を埋めた。

「私はどんなことがあってもフランスには行かないわよ。何日も家を空けたくない。私の言っていること……。」

「分かってる。」

「たとえ私が首になつたとしても……私は……。」

「うん、そうよねえ。」

彼女は激烈な感情のトンネルから抜け出たばかりだったために、直ぐに眠気が来た。しかし寝入ってはいけなれないと思つて、彼女は閉じようとする目を無理に開けようとした。目を開けようとするほど余計に目が閉じるので、彼女は今度は何かしやべればいいと思つた。彼女は何かを呟きながら、段々深い眠りについたが、彼女は自分が寝ながら何を呟いていたのか、永遠に知ることが出来なかつた。